Bilingualismと外国語教育

広島大学大学院　三　浦　省　五

はじめに

Bilingualism の研究は，従来，言語学者，心理学者，社会学者らによって行なわれてきたが，その研究の中には，外国語教育を考える場合，多くの示唆に富んだ成果が含まれている。すなわち，すでに２つの言語を使用している者を分析するbilingualism の研究は，学習者に２つの言語を使用させようと努力している外国語教育の機能を考慮する際に有役である。bilingualism の研究は，母国語と外国語（あるいは第２言語）の２つの言語に関係するできるだけ多くのaspects を考慮に入れており，そこから，外国語教育のみならず，広く言語教育という基礎を見出すことができるのである。

本論では，bilingual および bilingualism の意味と種類，bilingualism 研究における２言語の関係のとらえ方，bilingual の心理を概観したあと，bilingualism と外国語教育について考察してみる。

1　Bilingual と Bilingualism

これらの定義として，Webster's Third New International Dictionary(1961) は，bilingual: a person using two languages esp. habitually and with a control like that of a native speaker とし，また,bilingualism: the constant oral use of two languages としている。日本語では，それぞれ，「二重言語者」，「２国語話者」とか「２国語常用」などと言われている。文字通りの意味に解釈すると，bilingual は，歴史的・地理的，社会的・人種的に特殊な環境にのみ存在するわけであるが，日本のような環境では，biligual を「２つの国語を何らかの形で１個人の中に存在させている人」くらいに広く解釈しないと，bilingual と呼ばれる人はいない。J.A.Fishman は bilingualism を demonstrated ability to engage in communication via more than one language としているが，bilingualism 研究や外国語教育を考える際にはこの定義の方が好都合である。

Bilingualism の種類に関しては，様々な区分が行なわれてきた。たとえばProficiency の面から，complete bilingualism, perfect bilingualism, partial bilingualism, incipient bilingualism, passive bilingualism など，また function の面から home(-made) bilingualism, school(-made) bilingualism, teacher-made bilingualism, formal education (-made) bilingualism, immigrant-based bilingualism, street bilingualism などである。第３の分類法はdichotomies によるもので，たとえば，co-ordinate bilingualism - compound bilingualism, comprehensive bilingualism - limited bilingualism, general bilingualism - specific bilingualismのように観念的に相対するものを想定して，どちらの傾向が強いかを検討しようとするものである。第１の分類によると，いつperfect bilingual になったかという境界線を引くことが困難であり，またこの分類だと重複を許すということもありうる。第２の分類では，第２言語の習得場所や方法を述べたにすぎない。第３の方法だとて，一方が他の一方の存在を全く許さないということはまれである。しかし最もよく用いられる区分法は，coordinate bilingualism（以下CR と略す）と com-

pound bilingualism（CP）である。

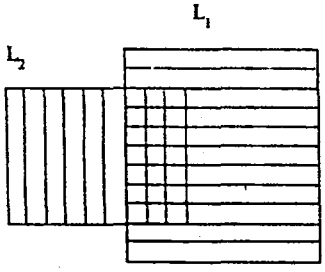
子供の生活環境に２つの言語が存在する場合 ── たとえば両親が別々の言語を話したり，社会で２つの言語が使用されている場合 ── 子供はおのおのの言語を母国語として習得する。こうした学習によれば，２つの言語体系は別々に習得され，２つの独立した意味体系を持つことになる。これがCR であり，一方CP は，すでに習得した母国語での意味を介して第２言語の学習が行なわれる際生ずるものである。

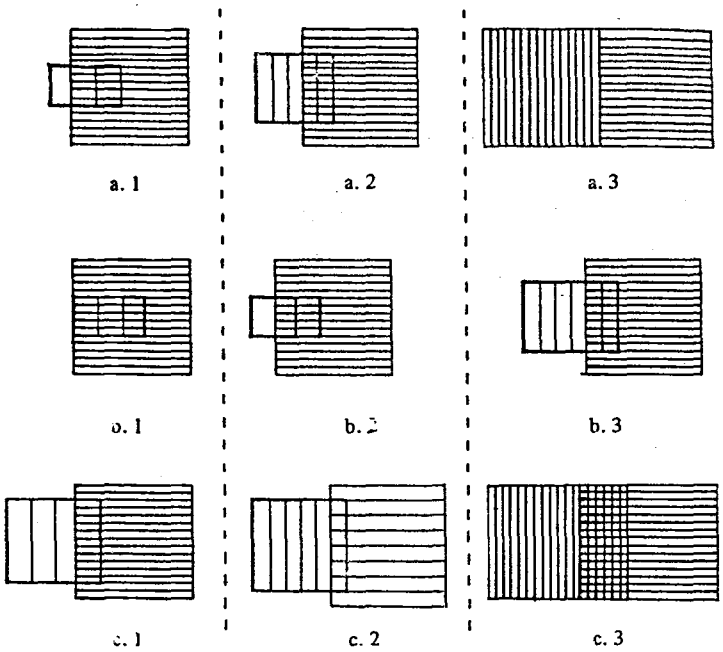
以上のように理論的には２つに区分できるが，その境界線を引くことは困難である。なぜなら多くの場合，学習者の言語習得レベル，話題，話者同志の関係などにより，ＣＰあるいはＣＲ的性格を示すようになる。従ってbilingualism の研究では，学習者の言語的あるいは心理的要因が種々の変数より成立していると仮定して，それらをscale にし，そのprofile を出そうとする。図１はＣＲを，図２はＣＰを言語の発達の面も加えて図示したものである。

2　Bilingualism における２言語の関係のとらえ方

２言語の関係については，上でも多少触れたが，ここではさらに詳しく述べてみる。我々が普通bilingual と言えば，２つの言語を同じ程度に習得している状態を思い浮べるのであるが，J.A. Fishman によれば，厳密な意味において equal and advanced mastery of two languages ということはあり得ない。これは容易に推察しうることである。彼は，bilingual と呼ばれる人でも，次の４つの面において１個人の有する２つの言語機能は異なっていると述べている。つまり，(1)media における相違：これは，たとえばある人が，２つの言語を同じ程度に話すことはできるけれども，読み，書きは同程度にできない場合などである。(2) roles における相違：comprehension，production，inner speech の面においての相違。(3) formality levels における相違：すなわち，intimate communication と formal communication の場合では，使用言語が異なる場合である。(4) domains of interaction による相違：たとえば，家庭のことを表現する時の言語と，宗教・芸術・政治について話す時の言語は異なる場合などである。

L.A.Jakobovits は，２言語の関係をわかりやすく図で示している。図３は，１個人のある言語心理学的変数について２言語の「干渉」（２つの四角形の重なり合っている部分で，ケイは，それぞれの言語の標準話者のものに近いとそれだけ密に示されている）と，それぞれの言語の「熟達度」（２つの四角形の大きさで示されている）を表わしている。またこの図をもとにして，学習者の「言語心理学的変数」，たとえば，文法力，発音，語いなどａ，ｂ，ｃと縦にとり，「時間的変数」，たとえば入門期，中級，上級段階など時間的経過を１，２，３と横に表わして，２言語の関係を総合的にモデル化したのが図４である。ａ．１では右側の四角形（母国語文法の熟達度）に較べて左側の四角形（第２言語の文法の熟達度）が小さく，線も疎であること，また両四角形はほとんど重なり合っていることから，第２言語の文法はまた貧弱で，日本語からの干渉も大きく，ＣＰの傾向が圧倒的に強い。ａ．２になると文法はかなり確立しており干渉の割合も少なくなっている。ａ．３になると文法の熟達度は母国語のそれと同じ位に確立し，第２言語の標準的話者の文法と同じ位になっている。また母国語からの干渉は見られず，完全にＣＲになっている。このようなモデルを中心に２言語の関係について調べてみるとbilingual と言われる人の中にもかなりの多様性があることがうかがえる。





3　Bilingualism における言語心理学的特徴

以上我々はbilingualism をＣＲとＣＰの２つのタイプに分類してきたが，この分類は観念的なもので全体的に，否，言語心理学的な１つの変数についても明確に境界線を求める事は困難である。しかしここでは，上図で見てきたような，第２言語の四角形が第１言語の四角形の中に含まれるようなＣＰと，２つの四角形が互に隣接するようなＣＲを極端な例としてとり上げてみる。第２言語を使用したり，あるいはそれについて何らかの知識がある者はこの両極端の間のどこかに位置していることは容易に考えられる。ＣＰは普通の場合，既習の母国語を手段として第２言語を学習する際に生ずるものであり，母国語の干渉は最も大で，第２言語は学習者にとっては道具的なものである。彼の中にはただ１つの言語体系しか存在せず，２つの言語は，その１つの言語体系（母国語）を土台として，お互に他の言語から要素を追加することにより豊富になっていく。学習者の民族意識が高ければ第２言語を道具としてみなし，ＣＰ的傾向が現われることは応々指摘されている。従って，第２の言語を学習したといってもやはり彼は１つの人格しか有していない。母国語で考えて，もう一方の言語に翻訳するのを常とする。ＣＲは，ある時点で使用されている言語で考え表現する。従って２つの隔離した言語体系と２つの自己を有することになる。このためＣＲは，心理的に不定定で，民族意識および言語に対する態度も中庸をえたものでなければＣＲは推持できない。第２の言語に対して統合的な見方をし，民族意識が極端に低ければ，第１言語の方が第２言語に吸収されてＣＰになってしまうのである。

こうした変化は移民の中に見られることで，E.HaugenはＣＲになるまでの学習者の心理的変化の過程を次の５段階で示している。それらは，(1)先を見越して学習の準備をする段階，(2)第２言語を学習し，できるだけ多くの機会にそれを使用しようとする努力する初期の順応の段階，(3)自己の知識の不足を認識し失望する段階，(4)従来の自己を失なうのではないかと不安になったり，新しい自己が確立していないのを知り，応々にして第１言語の使用に逆戻りする危機の段階，(5)第２言語やその社会に統合する段階，である。これらは，言語の集中訓練の間によく観察される学生の心理状態である。

4 Bilingualism 研究と外国語教育

Bilingualism の研究は，native に近い２ケ国語話者を言語学的，心理学的，社会学的な視点から分析している。すなわち，言語学者は，２つの言語を sound，grammatical structure，lexical repertoireの干渉面から研究し，干渉の少ない者をmore bilingual とする。また心理学者は，automaticity あるいは rapidity of response，また連想など種々の心理的機能の面から研究を進め，社会学者は，両言語の使用頻度の面から研究し，より多く第２言語を用いる者をmore bilingual としてきた。外国語教師は，反対に，学習者をある種の bilingual に育成しようと努力する。最近では，早期外国語教育，コミュニケーションを重視した外国語の教育など，学習者の外国語能力をnative のそれに近づけようと努力がうかがえる。これは明らかにＣＲを目指したものであるが，先に述べた通り，ＣＲを作り出す事は，学習者に，できるだけ分離した２つの言語体系を確立するように強制する事であり，そのためには，使用頻度も相当高くせねばならない。一般には，ＣＲに近いほど外国語教授は成功したと言っている。

教師はまた，言語的，あるいは，知的，情緒的，態度の問題も含めて心理学的に，どのような bilingualism の能力を学習者の中に作ろうとしているのか，media, roles, formality levels, domains of interactionの面について（W.F.Mackey など他の分類を試みている学者もいるが），その詳細な priorities(bilingual dominance configuration) を，社会の現状と合せて教育目標として決定しなければならない。そこから外国語（日本では主として英語）教育の目的論，教材論，方法論，学習者論，評価論が生まれてくるように思える。「読んでは訳し，訳しては読み」は，決して悪いとは言えないが（教育目標と合致すれば），linguistic knowledge の段階に留まり，決して総合的な linguistic competence や performance に移行することはないであろう。

おわりに

外国語の教育は，有役と思われる関連諸科学の理論を借用してきた。英語教育学の樹立を志向する際，すでに確立していると思える bilinguals を用いての研究は，われわれが外国語である英語だけでなく，母国語を含めた言語教育という広い視野を提供し，研究の方法にも有役な点が多い。

主要参考文献

1. Carroll, J. B., Language and Thought, Prentice-Hall, 1964.
2. Fishman, J. A., "The Implications of Bilingualism for Language Teaching and Language Learning," in Albert Valdman (Ed.), Trends in Language Teaching, McGraw-Hill, 1966.
3. Haugen, E., "Bilingualism as a Goal of Foreign Language Teaching," in Virginia French Allen (Ed.), On Teaching English to Speakers of Other Languages, National Council of Teachers of English, 1965.
4. Jakobovits, L. A., "Dimensionality of Compound-Coordinate Bilingualism," Language Learning, Special Issue, No. 3, 1968.
5. _____, Foreign Language Learning: A Psycholinguistic Analysis of the Issue, Newbury House Publishers, 1970.
6. Kelly, L. G. (Ed.), Description and Measurement of Bilingualism, University of Toronto Press, 1969.
7. Lambert, W. E., "Psychological Approaches to the Study of Language," in Harold B. Allen (Ed.), Teaching English as a Second Language, McGraw-Hill, 1965.